

はじめに

モチベーション研究所の年次報告書『モチベーション研究』第11号をお届けいたします。本号は原著論文2本、資料論文3本、研究所フォーラム抄録を1本掲載することができました。ご投稿いただいた皆様、ならびにフォーラムでのご講演内容掲載にご快諾いただきました林卓志先生(朝日大学経営学部准教授)に、あらためて御礼申し上げます。

2020年はコロナ禍の影響もあり予定されていた2020年2月および11月のフォーラムについては中止とさせていただきますが、2021年2月27日から5月5日までの期間においてYouTubeお用の配信形式で、モチベーション研究所第16回フォーラムを「最高のコーチは、計測する」というテーマにて開催させていただきました。林卓志先生には素晴らしい内容をご提供いただき大変感謝しております。

第17回フォーラムは、「みんなで楽しく発達するパフォーマンス心理学入門」と題しまして2022年2月5日(土)にZoom配信形式で茂呂雄二先生(東京成徳大学応用心理学部・心理学研究科教授)ご講演をいただきました。茂呂先生のご講演内容についても次号に掲載を予定しております。

「働く」意義

2021年も世界がコロナ禍に翻弄されるなか、日本では延期されていた2020東京オリンピックが無観客のままに開催され、その開催に対して世界から様々な評価があったなか、結果的に国内では肯定的な声が多かったと聞いています。恐らく、2021年を振り返って何かを語るとするならばこのオリンピックが共通した話題となるのでしょうか、あえてこの話題を取り上げることを回避しようとする私はかなりの天邪鬼のようです。

コロナ禍の前には「リモートワーク」や「テレワーク」なる言葉がこれほど一般的になるとは思いもしませんでした。実態は別として、働き方に一石を投じたことは事実です。その反面、エッセンシャル・ワーカーといわれる対人支援職を中心とした社会を支える現場で働く人たちが、コロナ禍という状況で大きなリスクと差別に耐えながら、それぞれの現場において尽力していたことにどれだけの人たちが目を向けていたでしょう。医療の現場において看護師や医師が未知の感染症に尽力しているにもかかわらず、医療従事者やその家族に対する誹謗中傷も含めて社会の対応は決して快いものだけではありませんでした。このような状況にも関わらず私たちの健康を支え続けてくれた医療関係者には頭が下がる思いです。

アメリカの心理学者エドウィン・ロックは「職務満足は、個人の仕事の評価や仕事の経験からもたらされる喜ばしい感情、もしくは肯定的な感情である」と述べています。この定義からもわかるように職務への満足は仕事が生み出す評価されその個人が肯定的な感情を持つことだと理解することができます。しかし、医療や看護、福祉、教育などの対人援助を主とする職場ではそれに従事する者だけでなく、サービスを受ける側の感情変化によって職務に対する満足度が大きく変化するともいわれています。医療にかかわる職場の場合、患者の状態によって患者自身の感情も複雑になり、医療従事者が献身的に医療を提供しても患者の肯定的な感情に繋がるとは限りません。そのような食い違いは医療従事者の「無力感」に繋がりがやすく、ましてやその当事者ではない第三者からのさまざまな否定的な意見や言葉は医療従事者の「無力感」をさらに増幅することになるのではないかと懸念されます。

看護師を対象とした撫養ら(2011)の研究では、仕事への誇りややりがいといった「仕事に対する肯定的感情」、自らの判断のもとに行動できる「専門職としての自律」、看護実践を通して成功体験を積み重ね、看護への手応えを得ているという「仕事の成果の確認」、看護師個々の成長につながる上司からの管理的、教育的、情緒的支援に関する「上司からの支援」、同僚、他職種、医師、患者から様々な評価を受けているという「他者とのつながり」、その他「働きやすい労働環境」が職務満足度を構成する要因として示しています。このように、医療従事者の職務満足度は仕事に対する肯定的な感情によってその質を向上させることは紛れもない事実で、コロナ禍の中で奮闘する医療従事者へ感謝を示すことは私たちの健康や生命を守るうえでとても大切なことだと認識しなければなりません。私たちの生活を支えてくれている方々の「職務」を通じて、改めて私たち自身の「働く」意義を問い直す必要があるのではないかと感じています。

今年度もコロナ禍により、思うようなモチベーション研究所の活動ができなかったことを率直に反省するとともに、新たな活動方法を模索していきたいと考えています。今後とも皆さまのご理解とご支援を賜ることができるよう、よろしく願いいたします。

引用文献

撫養真紀子・勝山貴美子・尾崎フサ子・青山ヒフミ. (2011). 一般病院に勤務する看護師の職務満足度を構成する概念 日本看護管理学会誌Vol 15, No.1, 57-65.